

テキサス州クリスタルシティ収容所を通して見る 日系アメリカ人の戦争体験の地域性

武 井 勲 ^{*1}

Regional Aspects of Japanese American Wartime Experiences: Crystal City Internment Camp, Texas

Isao TAKEI ^{*1}

This paper investigates some regional aspects of Japanese American wartime experiences in Texas and the role of Crystal City Internment Camp as a holding center for Japanese internees from different backgrounds; the great majority of the Japanese in this particular institution were from outside of the state. Based on an examination of little-known published records of certain key figures, this article describes the lives and atmosphere within the camp as well as the wartime relationship between Japanese Texans and Texan Anglos. The study reveals sharp contrasts in the experiences of Japanese Texans, the Japanese from the West Coast of the U.S., and those from Latin America. The Japanese Texans were subject to less antipathy from local Anglos due to their small population size, their contributions to local agriculture, and their compatibility with the local community.

はじめに

第二次世界大戦期の米国における、日系人の強制収容の経験および差別と苦難は、日系アメリカ人研究の主要テーマであり続けている¹。彼らの強制収容はカリフォルニアをはじめとする西海岸地域で重点的に行われていたことから、これらの地域に関する文献や記述が圧倒的に多い²。

あまり知られていないが、テキサス州には5つの収容所が存在した（地図参照）³。テキサス日系人は強制立ち退きや収容の対象にはならなかったが、それでも敵性外国人として連行され、銀行口座を凍結され、長期間拘留された者もいた。日系人のみで構成された第442連隊が、「失われた大隊」（テキサス大隊）を救出するために多くの犠牲を払ったのと同じ時期、テキサスの収容所には善良な日系人が収監されたという、背反した史

実もある。

本稿では、合衆国内で唯一の家族用収容所であり、戦時中最大規模を誇ったクリスタルシティにおける日本人抑留者の事例を交えながら、テキサス日系人の戦争体験を示す記述を検討することで、彼らの地域的特徴を探り出してみたい。

テキサス州における日系人の戦争体験を扱った主な資料として、まずThomas K. Walls（1987）*The Japanese Texans*が挙げられる。そこには、収容所を含む当時の様子が、いくつかの人物を通して描かれている。同様の資料として、他にもテキサス大学サンアントニオ校テキサス文化研究所の展示パネルや、新日米新聞社東京支社（編）（1961）『米國日系人百年史』等がある。また、テキサス歴史委員会がウェブ上で公開している資料には、テキサス州や連邦政府の視点に基づいた、

*1 日本大学国際関係学部国際総合政策学科 准教授 Associate Professor, Department of International Studies, College of International Relations, Nihon University

当時の様子や見解が記されている。

筆者は、こうした資料に見られる、異なる記述に整合性を持たせながら、戦前・戦時中のテキサスにおける日系人の歩みを、より包括的にまとめることを試みている。

最終的には、テキサスの日系人の生活・戦争体験の事例が社会学における同化や人種格差、そして人種差別の理論にどのように当てはまるのかを考察しようとする。例えば、西海岸からの日系人が比較的長期間収容されていた一方、食糧供給が重視される状況の下で主に農業に従事していたテキサス日系人は概して、反日憎悪とは無縁の暮らしを送っていた。また地理的な要因から、テキサスにはペルーをはじめとした中南米諸国からの国外退去者が、数多く抑留されていた。こうした日系人に対する処遇の違いは、どこにあるのだろうか。戦争やパンデミックといった国家の危機的状況では、人種が取り沙汰されるが、日系人差別のあり方を探ることは、現在にも通じる課題である。

戦後、日本への強制送還命令の違法性が審理され始めると、ペルーへの帰国を望む日系人はクリスタルシティに移送された。そのため同施設は、1948年2月まで稼働を続けた、全米で唯一の収容所であった。

本稿の結びで、戦時テキサスに関する研究者の取り組みが、新たな史実の発掘より知識の伝承に移行してきているという現状を、指摘しておく。

テキサス州における収容所の概観

州内の主な3つの収容所に収監されていた日系人の大部分は、アラスカやハワイを含む、合衆国の様々な地域から連行されて来た。その他に、北アメリカ、南アメリカ、中央アメリカの13の国から移送されて来た者もいた⁴。

収容所はケネディ、シーガビルとクリスタルシティの3か所にあった。それらと、8つの州にまたがって少なくとも12か所存在した他の収容所は、12万人近くの日系アメリカ人が拘留されていた10か所の「再定住センター」よりもかなり小規模であった。収容所は別の面でもまた、再定住センターとは異なっていた。「再定住センター」は、1942年3月にルーズベルト大統領によって組

織された、連邦政府の部局である、戦時転住局によって運営されていた。その任務は、西海岸から立ち退かされた日系アメリカ人の「再定住、維持ならびに監督」を遂行することであった。一方「収容所」は、司法省から権限を付与された移民帰化局によって管理・運営されていた。その任務は、「潜在的な危険性のある」敵性外国人およびその家族を収容し、管理することにあった。ドイツ人や少数のイタリア人も移民帰化局の管理下に置かれたが、大部分は日系人であった⁵。概して生活条件は、テキサス州内のものを含めて、「収容所」の方が「再定住センター」よりも良かったとされる⁶。

本国送還による収容者数の減少、新たな拘束者による増加、加えて州外の収容所から、また州内の収容所間の移動もあり、正確な収容者数は定かではないが、上記3か所の施設には多い時で、総計5,000人ないし6,000人の収容者がおり、そのうち約4,000人が日系人であったと推測されている。これは、相当数の日系人がテキサスに流入したことを意味する⁷。

日系人が収容されていた時期のセンサスは利用出来ないが、連邦政府の収容計画は1940年のテキサス日系人の人口458人を、10倍近く増加させた。各施設の収容者数は、クリスタルシティで2,446人、ケネディで250人、またシーガビルで360人であったとする報告がある⁸。次に、これら3つの収容所の状況を、クリスタルシティを中心に概観する。



地図 テキサス州内の収容所⁹

ケネディ収容所

ケネディ収容所は男子専用で、サンアントニオの南東50マイルに位置する、人口2,900人ほどの小さな町にあった。日本人と、若干のイタリア人も収監されていたが、当初の主な収容者はドイツ人であった。後に、中南米諸国から移送されてきた数百人の日系人が収容されるようになった。最終的には、追加のスペースを必要としていたフォート・サム・ヒューストン基地の捕虜収容所の支部となり、ドイツ人と日本人が収容されていた¹⁰。

テキサス日系人の大部分はケネディに収容されており、地元の農家の下で低賃金で働いたりしていた¹¹。彼らの中には、白人の近隣住民らが忠誠心を証明することで早期に釈放される者もいたが、西海岸からやってきた日系人の大部分には当てはまらなかった。日系人のうち数百人がやがて日本に送還されたが、大部分の人々は、その後の4年間を1944年9月に閉鎖されるまでの同施設か、他の12か所ほどある収容所の一つで、有刺鉄線のフェンスに囲まれて過ごしていた¹²。

シーガビル収容所

ダラスの南東の郊外にある小さな町、シーガビルにあった収容所は元々、刑務局が建設した女子の模範感化院であった。1942年4月1日に移民帰化局に譲渡されると、当初は西海岸から送られて来た約50人の日系アメリカ人女性の語学教師を収容した。1942年には中南米から移送されてきた日系人のために、合板造りの小屋が追加で設営されたが、翌年9月には彼らのほぼ全員が本国送還となり、残りの数家族がクリスタルシティへ移送された。よって1945年5月に同留置所が閉鎖されるまでの期間に収容されていたのは、独身女性と子どものいない夫婦だけであった¹³。

クリスタルシティ収容所

多くの敵性外国人は世帯主の父親だったので、彼らと再会するために自発的に収容されたいという妻や子供たちからの要望が、移民帰化局に多く寄せられるようになった。同局と司法省により、テキサス南部ザバラ郡にある人口6,000人の小さ

な町に設立されたクリスタルシティ収容所は、移民帰化局の収容所の中で唯一、家族向けに設立された。しかも、戦時中は最大規模を誇った¹⁴。

世界恐慌の際、農業安定局が町の郊外の土地を取得していたこともあり、移民帰化局はクリスタルシティを収容所の候補地を選んだ。またケネディやシーガビルと同様に、クリスタルシティの施設も元々は、敵性外国人を収容するために建てられたものではなかった。それは戦前、政府が補助金を支給する、季節農業労働者のための居住キャンプであった¹⁵。

クリスタルシティには、最も多い時には2,600人の日系人が収容されており、その大多数は、学齢期の子供達であった¹⁶。その大半が南米ペルーおよびボリビアからの抑留日本人で、他に約200人のハワイ被抑留者が収容され、残りは大陸各地から抑留して送られて来た。ハワイ組は1945年12月、ペルーなど南米組は翌1946年の春にいずれも出所した。一時的にせよ、これだけの人数がテキサス州の一角で数年間を送ったことは、「テキサス州日系人史上、最大の出来事」であった¹⁷。

マンザナー強制収容所から来た者には、本物の学校に見えたと話すように、クリスタルシティの学校は環境が良好で、唯一無いものはアメリカンフットボールのチームだけだったという。二世の子供たちはアメリカンスクールに通い、本国に送還される見通しの家族の子供たちは、日本語学校を選んだ¹⁸。

学校行事以外にも、各種スポーツイベントや芝居の上演、映画鑑賞、施設外でのピクニックが行われ、図書館や教会も揃っており、日本語新聞『自治會時報』や英字新聞『クリスタルシティ・タイムズ』が発行されていた¹⁹。時給10セントで1週間当たり最大4ドルの上限で、労働も認められていた。収容所の内外で果樹園や菜園を管理したり、肉や卵を確保するために豚や鶏を飼育したり、蜂蜜を採るためにミツバチの巣箱を管理する者もいた²⁰。

様々な活動と取り組みにより、クリスタルシティの収容所は小さな町のようなようだった。しかし、この収容施設が他のものと大きく異なっていたのは、家族ごとに住居が提供された点であり、台所

と食堂、トイレと洗面所は家族の者だけで使用できた。収容者らは花壇や日本庭園を造り、竹を植えるなど、施設を真の地域社会に変身させることを試みた²¹。市場には豊富な種類の肉や野菜、その他の食料品が揃い、全ての収容者の民族的な味の好みを満たした。日本人家族は週2回配達される、米や新鮮な魚を好んだ。収容所内では多くの日系人が結婚し、月に2人ほどの割合で子供が生まれた。1945年の春にはベビーブームが訪れ、収容所の病院では平均して毎週1回以上の出産があった²²。

戦後も日系人を収容し続けたクリスタルシティ—ペルー出身の日系人青年、勝呂・ポール・修平を例に—

1946年の正月には、中南米から来た2,100人の収容者のうち650人足らずの日本人が、合衆国に残っていた。これらの残留者のうち、ほとんど全員はペルーからやって来た人達であった。その一人が当時28歳の勝呂・ポール・修平である。勝呂は1916年に静岡県清水市に生まれ、清水商業実践学校を卒業後、1940年に商業実習生としてペルーのリマに渡り、ペルー綿花会社で輸出入ブローカーとして勤務した。日本の真珠湾攻撃後、彼の会社は閉鎖を余儀なくされた。その後2年間、彼は移民の子供たちに日本語を教えて細々と生計を立てた。1944年2月、勝呂はペルー当局に逮捕され、300人以上の日本人と共に、カヤオでパナマ運河経由ニューオーリンズ行きの船に乗せられた²³。

勝呂は独身だったので、テキサス州のケネディに送られた。7か月後に同収容所が閉鎖されると、ニューメキシコ州サンタフェにある別の収容所に移送された。1946年4月の強制送還審問で、勝呂は自発的に日本に帰国することを断固拒否した。しかしペルーが彼の帰国を認めるはずもなかったので、合衆国は勝呂をカリフォルニア南部のサンペドロにある移民帰化局に移送し、国外追放までの待機を命じた²⁴。

その間、人権擁護者たちは勝呂のような人々の苦境に注意を向けていた。1946年6月の一連の法的な動きの中で、日系ペルー人の全ての強制送還

命令は、カリフォルニアの合衆国地方裁判所における2つの試訴の審理が終わるまで延期された。当の法的問題が解決するまで何か月もかかるかもしれない（最終的には8年かかった）ので、連邦政府は勝呂を含むサンペドロの日本人を、クリスタルシティに移送した。これにより、同施設は合衆国で戦後も運営を続けた唯一の収容所となった²⁵。

1947年当時、合衆国には300人足らずの日系ペルー人が残留していた。絶望に駆られて自ら日本に帰国した者もいれば、ペルーに戻ることを許された者もいた。依然としてクリスタルシティに留まっている日系ペルー人たちは、移民帰化局の係官から仮釈放が認められるように、外で仕事を与えてくれる身元引受人を探すよう促された。その一つが、ニュージャージー州のシーブルック農園であった。この農園は戦時中、西海岸から来た1,000人以上の日系アメリカ人の立ち退き者を雇ったが、戦争が終わると彼らの大部分はより良い仕事を求めて去って行った。この農園は日本人労働者に非常に満足していたので、更なる人手を雇うべく1946年と1947年に、クリスタルシティに周旋人を送った。こうして、勝呂を含めた全部で178人の日系ペルー人が雇用されたのである²⁶。

勝呂は同農園で2年間就労した後、シカゴの工場で働き、日系アメリカ人女性と結婚した。1952年、ヒューストンの経済的将来性を称賛する新聞記事を読んだ夫婦は、現地に移住した。勝呂は植木園で経験を積んだ後、1957年に独立して植木園を経営した²⁷。

1954年8月、第二次世界大戦終結のほぼ9年後に、合衆国議会は「強制収容のため中南米諸国から連行されて来た外国人は誰でも」合衆国に留まり帰化市民となる権利を持つと規定した法律を制定し、こうした日系人の苦境を遅ればせながら認めた。ラテンアメリカから連行されて来た日本人にとって、戦争はこの時やっと終わったのである²⁸。

クリスタルシティ収容所は、終戦からおおよそ30か月後の、1948年2月27日に閉鎖された。1948年11月、クリスタルシティ学区は主に収容所のフェンスで囲まれた部分に当たる90エーカーの土地を、戦時資産管理事務局から購入した。1952年に、市は飛行場を建設するために北部と

東部の土地を追加で購入した。後に、収容所跡地には複数の学校が建設された²⁹。

テキサス日系人の生活と戦争体験

合衆国が戦争に突入する数か月前から、連邦捜査局はテキサス日系人コミュニティでの会合や社交的な集まりを絶えず監視していた。真珠湾攻撃以降、日本人による数人以上の公の集会は厳しく禁じられ、特別な許可がなければ実施できなかった。連邦政府はまた、合衆国の宣戦布告とともに、自宅から半径数マイル以上の日系人の移動の自由を制限した。彼らがこの範囲外を移動するには、文書に記入し公式の許可を得なければならなかった。彼らは他にも銀行預金口座の凍結、現金引き出しの禁止、それに捜査官による家宅捜索や尋問といった侵害行為を経験した³⁰。

日米開戦はテキサス日系人社会にも大きな衝撃を与え、州内各地の有力者が抑留されたとはいえ、一般的に日本人への風当たりは格別悪くはなかった³¹。彼らの多くは一世男性で、数週間から数年間に渡って拘留されたが、白人の隣人らが忠誠心を保証することで、釈放されることもあった。家長が不在の間は、残された家族が農場や商売を守り抜いた。州の機関であるテキサス外国人資産管理局は日本人農場の資産を管理下に置いたが、リオグランデ平原やエルパソなどでは、戦時中でも日系人の野菜販売は引き続き順調だったという³²。

リオグランデ平原では、全ての日本人家族に対して連邦捜査局の取り調べが行われ、外出禁止令、武器の提出、そして銀行預金の凍結などが実施されたが、わずか数日で解除となった。ハーリンゲンでのみ、若干の反日気運があっただけで、他は普段と変わらなかった。実際に、同平原において検挙あるいは抑留された日本人は、一人もいなかった³³。差別的行為の多くは、例えば地域のある日本人が、数年来ひいきにしていた店でサービスを拒絶されるといった、比較的ささいなものであった³⁴。エルパソでも同様に、一般的に反日的な雰囲気はほとんど見られなかったようだ³⁵。

フォート・サム・ヒューストン収容所のあったサンアントニオでは、日米開戦の時に洋食店を営んでいた川添トニー武夫や東洋カフェの創業者

菊池某らが抑留されたが、メキシコ人が多い当地方の一般的な対日感情は、格別悪くなかった³⁶。

この時代のテキサス日系人が苦境に立たされていたのは事実だが、それでも20世紀前半に築き上げられた白人社会との信頼関係により、不幸な時代を乗り切った彼らの姿を垣間見ることが出来る。それは、広く認識されている西海岸の日系アメリカ人に対する厳格な対処とは異なる印象を与え得るものであった。ここでは、そのいくつかの事例を紹介したい。

収容所から比較的早期に釈放された事例

①ムタ・ヒデオーダラスの美術商

ダラスの大通りで「オリエンタル・アート・カンパニー」を営んでいたムタ・ヒデオは真珠湾攻撃の直後、政府当局により閉店を命じられたが、彼が合衆国の愛国的な市民であるということとを訴える嘆願書に200名以上の署名が集まったことで、2日ほどで店を再開することができた³⁷。

②岸吉松—大規模事業主として地域に貢献

新潟県の名家出身の岸吉松は当時、テリーという町でテキサス日系人最大の米作コロニーを営んでいた。多くの日本人世帯主のように、岸は真珠湾攻撃後に逮捕・監禁されたが、これまでの数々の慈善活動、合衆国への熱烈な忠誠および思いやりにあふれた地域貢献などにより、ケネディ収容所に2か月間拘留されただけで済んだ³⁸。

③赤木福太郎—隣人たちの宣誓供述書

赤木家は1942年、シェルドンの農場を訪れた連邦捜査官と地元警察による家宅捜索を受けた。福太郎、息子トラタ、そして叔父の平松ケンジロウの3名が、連邦捜査局の事情聴取のためヒューストンに連行された。トラタと平松は同日の深夜零時過ぎに釈放されたが、63歳の福太郎は3か月間にわたり監禁された。来季の新しい作付けの時期を迎えると、一家は福太郎の指示を失い途方に暮れた。当局への嘆願により短時間の帰宅が認められたが、農場を歩き回って作付けの指示を終えると、再びヒューストンに連れ戻された³⁹。

ヒューストンの合衆国地方検事局に援助を求め

るため訪問を重ねる折、トラタの妻で非日系人のビアートリスはある時弁護士との話し合いの中で、福太郎の忠誠を保証してくれそうな隣人や友人たちの宣誓供述書を集めるよう勧められた。シェルドンの地元のカフェのオーナーたちは、宣誓供述書を組織的に集めることを引き受けてくれた。彼女は10人の隣人から陳述を集めたが、オーナーたちはそれぞれ、福太郎とどれ位長く、またどのような関係により交際してきたか、そして友人や隣人として彼をどう思っているか記した。彼らの陳述はタイプされ、署名され、公証された後、合衆国地方検事局に提出された⁴⁰。

3か月の監禁の後、福太郎は敵性外国人聴聞会において、ついに発言の機会を与えられた。隣人たちの陳述のおかげで彼は釈放され、帰宅することを許されたのであった⁴¹。

④岡林実―忠誠心を証明する宣誓供述書の提出

ヒューストン地域の日本人コミュニティで積極的に活動していた野菜農家の岡林実は、ケネディ収容所に拘留された。上述の赤木福太郎を釈放に導いたのと同様の作戦で、岡林の日本人以外の友人たちは彼の忠誠心を証明する宣誓供述書に署名して、当局に提出した。こうした行動のおかげで、岡林はわずか3か月で釈放されることになった⁴²。

⑤片岡レオーヒューストンの庭師と雇用者との絆

1931年2月に、ヒューストン港から密入国した片岡レオは、貧しい農家の出身であった。ガルベ斯顿にある日本人レストラン店主の家に数日間身を隠した後、リーグシティ郊外で輸送園芸を営む日本人の下で3か月間働いた。続いて、ウェブスターの西原清顕の下で2年半家政夫として働くと、ヒューストンの庭師に1年間従事した。その後新居三郎の「ジャパニーズ植木園」では熱心に働いたおかげで、温室担当の親方を任された。その後も、ウェブスターの香川米吉やシェルドンの赤木福太郎の自宅に潜伏するなど、移民帰化局の逮捕から逃れるために転々としていた⁴³。

1936年、レオは新居三郎の勧めでジミー・エルキンスというヒューストンの裕福な弁護士の庭師として働き始めた。12年間、彼は住み込みで

エルキンス家に仕えた。真珠湾攻撃の直後、連邦捜査局がレオを連行した際、エルキンスはあらゆる手立てを尽くして彼を助け出そうとした。

レオの家で発見されたライフル銃と懐中電灯は、夜間庭に侵入してきたアルマジロを追い払うのに使うものだと、エルキンスは捜査官に説明した。彼はまた、レオがいかなるスパイ活動や破壊活動にも関与していないと確約し、もしレオを自由の身にしてくれるならば、彼の行動に対して全責任を負うとも申し出た。エルキンスのこのような活動により、レオは拘留された同じ日に釈放となった。他のテキサス日系人が相当長く拘留されていた時期に、この措置は並外れて迅速であった⁴⁴。

戦時中禁じられていた日系人の集会が例外的に認められた事例

ヒューストンの南に位置するアルバンで、「ジャパニーズ植木園」を経営していた新居三郎の妻、姜子が主催していた日本人女性による聖書勉強会「イエスの友の会」は、第二次世界大戦が始まってからも継続して開催されていた。戦時中は5人以上の日本人が集まることは禁じられていたが、ヒューストン在住の女性で、日本語が流ちょうな元宣教師、セシル・ランカスターが保証人となっていたため、彼女らの集会は規制から例外的に外されていたのである⁴⁵。

4年間の監禁生活にも関わらず日本庭園の造成でテキサス州に感謝の意を伝えた事例

和歌山県出身の谷口勇は、17歳の時に父の呼び寄せで渡米し、カリフォルニアで農業を営んだ。しかし日系コミュニティのリーダーという理由で日米開戦直後に逮捕されると、いくつかの収容所を経てクリスタルシティへと移送され、そこで家族と合流した。

4年間に及んだ監禁生活の中で、谷口は農地としてのリオグランデ平原の魅力をよく耳にしていた。1945年には特別許可を得て収容所の派遣団と共に、現地を視察した。1946年2月に出所し、カリフォルニア州の先住地に戻り財産整理を済ませると、同年リオグランデ平原のサンベニトに移り住んだ。谷口はそこで80歳で引退するまで、

最大で約500エーカーの農園を経営した⁴⁶。

谷口家は、長男の大和・アランがテキサス大学建築学部に正式に召喚されたのを機に、オースティンに移住した。そこで谷口は、テキサス州が自分の家族に与えてくれた様々な恩恵に対して感謝の意を表するために、また人々を楽しませたいという願望から、1969年にダウントウンにあるジルカー公園内に日本庭園を設計し、造成した。18ヶ月間たった一人で作業を続け、3エーカーほどの荒地を美しい空間に変えて見せたのである。桜の枝を野生のプラムに接ぎ木するなどして、伝統的な日本庭園の美しさと調和を、テキサスの地で再現したのである⁴⁷。



写真1 オースティンの谷口勇日本庭園

上空から眺めると“Austin”と読める一連の池、滝や半月橋、足場付きの睡蓮の池や竹林などがある庭園は、市民の憩いの場となっている（2011年2月筆者撮影）



写真2 クリスタルシティ収容所跡地①

現在では学校施設や住宅地となっており、かつての形跡は見当たらない（2011年9月筆者撮影）



写真3 クリスタルシティ収容所跡地②

人口7,000人ほどの小さな町は、今日でも地理的に非常に孤立している（2011年9月筆者撮影）

日系人収容施設とテキサス歴史委員会の取り組み

テキサス歴史委員会(Texas Historical Commission)が設置した、軍事施設および口述歴史プログラムに所属する、リラ・ラーコーツィ氏の報告によると、テキサス州内の5つの収容所はどれも、保存や見学者の訪問が困難となる状況に置かれている。例えばシーガビルは戦後、連邦刑務所に転換され、現在では低警備の連邦矯正施設となっている。またフォート・サム・ヒューストンとフォート・プリスは、全米で最も稼働率の高い軍事施設に位置づけられているため、敷地や建物内への立ち入りは制限され、実地調査は困難である。ケネディとクリスタルシティに至っては、立地の悪さに加え、戦時中の構造物のほとんど全てが失われ、敷地にはすでに新しい建物が建てられている⁴⁸。

同委員会は歴史の伝承のために、そして広大な土地ゆえに旧跡に足を運ぶことが困難であるという事情を考慮して、資料の電子化を進めている。例えばモバイルツアー「第二次世界大戦中の州内戦線」では、テキサス州における戦争遺産を広く紹介している⁴⁹。また、「クリスタルシティ（家族）捕虜収容所」では、当時の写真や映像、収容者や関係者らのインタビューの筆記録を公開している⁵⁰。他にも、様々なウェブページや電子版の小冊子などがあり、本稿でもそれらを参照している。

テキサス歴史委員会のこうした取り組みおよび姿勢から、戦時中の収容施設について新たな史料

を発見するよりも、既存の情報をいかに保存・整理し、後世に伝えていくかに重点を置いてきているようだ。例えば筆者は、州中央部に位置するオースティンからクリスタルシティを訪れたことがあるが、片道300キロメートル以上の移動は負担が大きい。せっかく現地を訪れても、当時の様子を今に伝える痕跡はなく、むしろテキサス歴史委員会が立てている「ステート・ヒストリカル・マーカー」と呼ばれる金属製の案内板だけが、跡地における限られた目印であった。加えて、同委員会による今後の調査活動は獲得資金の状況次第でもあり、人々の関心を高めることが最優先課題となっている。これが、テキサス州における第二次世界大戦に関する歴史的研究活動の現状である。

おわりに

1940年当時のテキサス日系人人口458人を10倍近く上回る規模で展開された、日系人の戦時抑留は『米國日系人百年史』(p.1266)において、「テキサス州日系人史上、最大の出来事」であったと紹介されている。特に同州における日系人の人口比率が非常に低かったこと、更に食糧供給が重視された戦時中に農業分野での影響力があったことから、反日感情はそれほど大きなものとはならなかった。

テキサス州内の施設に比較的長期間収容された人達は、西海岸から連行されて来た日系アメリカ人と、ペルーをはじめとした中南米諸国からの国外退去者である日系人であった。これらの日系人は、日本で拘束されているアメリカ人捕虜との交換要員であった。更に日系ラテンアメリカ人は、西海岸の日系アメリカ人のように経済的競争相手として嫌悪され、この機会を逃すまいとする中南米諸国の政府により国外追放された、「好ましくない日本人」であった⁵¹。

1970年センサスを用いた統計分析によると、強制収容による労働市場からの離脱は、25年後の日系アメリカ人男性の年間所得を9～13パーセント減少させたばかりでなく、自営業者の割合を増加させた反面、高度専門技術職の割合を減少させた⁵²。また合衆国政府の1982年の報告によると、日系一世と二世の戦争による損害額は、1945

年当時で3億7000万ドルにものぼったという試算もある⁵³。

連邦捜査局は、日系アメリカ人による破壊活動は、真珠湾攻撃の前にも後にも全く存在しなかったと公表している⁵⁴。過酷で屈辱的な戦時日本人抑留所の経験を否定する意図は微塵もないが、それでもその経験には一つの共通事項として集約できかねない、個々の文脈や地域性が存在するのも事実である。例えば、著名な日系アメリカ人研究者のハルミ・ベフの著作には、以下のような記述がある：

私の両親は、「収容所に入る前は、土曜日も日曜日も、夜も昼も働いたが、収容所では三年間仕事もせずに食べさせてもらって、あんな楽なことはなかった」と証言している。これが、ほとんどの一世たちのホンネだっただろう。暇に任せて絵画、俳句、詩吟、舞踊などいろいろな趣味に専念するものもあった。マンザナー収容所では同好者たちが枯山水の庭園さえ造った⁵⁵。

先述の谷口勇の事例は、戦時中のテキサスにおいて日系人が、敵性外国人として警戒すべき存在ではなかったことを示す好例と言えよう。家財を略奪され、反日感情が渦巻くカリフォルニアを逃れてサンベニトに移り住んだ一族は、オースティン地域において今日まで様々な形で活躍し、代表的なテキサス日系人の一人として紹介されている⁵⁶。

テキサス歴史委員会による、戦時抑留所に関連した取り組みをより詳しく把握することは、筆者の今後の課題である。その中でも特に、日系人がどの程度、そしてどのように取り上げられているのかについて、着目していきたい。また、先述の勝呂・ポール・修平の例に垣間見れるように、テキサス州内で収容された日系ラテンアメリカ人の更なる検証も、筆者の今後の重要な課題であることを示唆しておきたい。

谷口家の子孫はオースティン市内に建築設計事務所を構え、JASGA (Japan-America Society of Greater Austin) という日米文化交流会にも携わっている。こうしたテキサス日系人の三世以降の動向を特定することによって初めて、かつての

強制収容の経験を含めた彼らの歩みが広範かつ連続的に映し出され、真の意味でのテキサス日系人史が描き出され得るのであろう。

謝辞

本稿は科学研究費補助金、基盤研究（C）、2021～2023年度、課題番号21K01887「人種の壁を越えたアジア系アメリカ人の実態についての研究」の成果の一部である。記して御礼申し上げます。

註

1. 日系人の強制収容施設は英語で“Enemy Detention Facility,”“Concentration Camp,”または“Internment Camp”と呼ばれている。日本語では一般的に「強制収容所」と訳されているが、他にも「敵性外国人収容所」、「捕虜収容所」、「戦時日本人抑留所」などと呼ばれることもある。本稿では、「収容所」と統一表記する。
2. 例えば Fugita, Stephen S. and David J. O'Brien. 1991. *Japanese American Ethnicity: The Persistence of Community*. Seattle, WA: University of Washington Press; Kurashige, Lon. 2002. *Japanese American Celebration and Conflict: A History of Ethnic Identity and Festival in Los Angeles, 1934-1990*. Berkeley, CA: University of California Press; Spickard, Paul. 2009. *Japanese Americans: The Formation and Transformations of an Ethnic Group. Revised Edition*. New Brunswick, NJ: Rutgers University Press. 日本人の血を16分の1しか持たない者も含めて、あらゆる日系人が西海岸諸州から立ち退かされ、拘留された。10か所の再定住センターに収容された12万人の日系人のうち、5万人近くが女性であり、1万5千人以上が10歳未満の子供であった。そして7万人以上が合衆国で生まれたアメリカ市民であり、残りの大部分は在米20年から40年の人々であった（Walls, Thomas K.

1987. *The Japanese Texans*. San Antonio, TX: The University of Texas Institute of Texan Cultures at San Antonio, p. 148). 連邦捜査局は、日系アメリカ人による破壊活動の実例は真珠湾攻撃の前にも後にも全く存在しなかったと公表している（*Ibid.*, p. 145).

3. 5つのいずれも、合衆国司法省から権限を付与された移民帰化局によって管理・運営され、国務省とも連携していたが、サンアントニオにあるフォート・サム・ヒューストン（別名ドッド・フィールド）とエルパソのフォート・ブリスはどちらかというと、アメリカ陸軍の駐屯地を利用した、「臨時収容所」という位置づけであった[Allen, Paula. June 22, 2015. “Fort Sam once housed 3,500 POWs.” <https://www.expressnews.com/150years/military-sports/article/Fort-Sam-once-housed-3-500-POWs-6342571.php#photo-8197054>; Spickard, *op. cit.*, p. 108; The Texas Historical Commission (THC). August 2020 (a). *Fort Bliss, Fort Sam Houston, Kenedy, Seagoville, and Crystal City: Enemy Alien Internment in Texas during World War II*. p.1. https://www.thc.texas.gov/public/upload/publications/Alien_Enemy_Brochure_08_20.pdf].
4. Walls 1987, *op. cit.*, p. 175.
5. *Ibid.*, p. 176.
6. Niiya, Brian, Ed. 2001. *Encyclopedia of Japanese American History. An A-to-Z Reference from 1868 to the Present. Updated Edition*. New York, NY: Checkmark Books, p. 147.
7. Walls 1987, *op. cit.*, p. 176.
8. Kikumura-Yano, Akemi, Ed. 2002. *Encyclopedia of Japanese Descendants in the Americas*. Walnut Creek, CA: Altamira Press, p. 308.
9. Rakoczy, Lila. 2019. “Preserving Second World War Internment History: A Texas Perspective.” A transcript of a presentation at the Preserving U.S. Military Heritage: World War II to the Cold War, June 4-6, 2019, held in Fredericksburg, TX. <https://>

- www.nps.gov/articles/000/preserving-wwii-internment-history-in-texas.htm.
10. THC (a), *op. cit.*, p. 7; Walls 1987, *op. cit.*, p. 178.
 11. Brady, Marilyn Dell. 2004. *The Asian Texans*. College Station, TX: Texas A&M University Press, p. 63.
 12. Walls 1987, *op. cit.*, pp. 179-180.
 13. THC (a), *op. cit.*, pp. 8-9; *Ibid.*, pp. 185-187.
 14. Russell, Jan Jarboe. 2015. *The Train to Crystal City: FDR's Secret Prisoner Exchange Program and America's Only Family Internment Camp During World War II*. New York, NY: Scribner, pp. xv-xvi.
 15. Walls 1987, *op. cit.*, p. 187; The Texas Historical Commission (THC). August 2020 (b). *Crystal City Family Internment Camp: Enemy Alien Internment in Texas during World War II*, p. 2. https://www.thc.texas.gov/public/upload/Crystal_City_Brochure_08_20.pdf.
 16. Walls, *Ibid.*, p. 189.
 17. 新日米新聞社東京支社編. 『米國日系人百年史：在米日系人発展人士録』. 1961年, p. 1266.
 18. Walls 1987, *op. cit.*, pp. 190-193.
 19. *Ibid.*, pp. 193-195, 198-199.
 20. THC (b), *op. cit.*, p. 3; *Ibid.*, pp. 195-196.
 21. Walls, *Ibid.*, p. 196.
 22. *Ibid.*, p. 197.
 23. 新日米新聞社東京支社編, *op. cit.*, p. 1239; *Ibid.*, pp. 200-201.
 24. *Ibid.*, pp. 201-202.
 25. *Ibid.*, p. 202.
 26. *Ibid.*, p. 202.
 27. 新日米新聞社東京支社編, *op. cit.*, p. 1239; *Ibid.*, pp. 202-203.
 28. Walls, *Ibid.*, p. 203.
 29. THC (b), *op. cit.*, p. 7.
 30. Walls 1987, *op. cit.*, pp. 15, 149-151.
 31. 新日米新聞社東京支社編, *op. cit.*, p. 1246.
 32. Brady, *op. cit.*, p. 63. リオグランデ平原とは、メキシコ湾に近い、米墨国境のリオグランデ川流域地方を指す。ブラウズビルからマッカレンにかけての、直線70マイルほどの国境地帯であり、野菜や果物の一大産地となっている。
 33. 新日米新聞社東京支社編, *op. cit.*, p. 1250.
 34. Walls 1987, *op. cit.*, p. 149.
 35. 新日米新聞社東京支社編, *op. cit.*, p. 1265.
 36. *Ibid.*, p. 1248.
 37. Walls 1987, *op. cit.*, p. 154.
 38. Brady, *op. cit.*, pp. 46-49; *Ibid.*, pp. 93-96; Walls, Thomas K. 2007. "The Early Japanese Texans." pp. 91-111 in Irwin A. Tang, Ed., *Asian Texans: Our Histories and Our Lives*. Austin, TX: The it Works, p. 103.
 39. Walls 1987, *op. cit.*, pp. 151-153.
 40. *Ibid.*, p. 153.
 41. *Ibid.*, pp. 153-154.
 42. *Ibid.*, pp. 177-179.
 43. *Ibid.*, pp. 129-134.
 44. *Ibid.*, pp. 134-135.
 45. Brady, *op. cit.*, p. 53; *Ibid.*, pp. 125-127.
 46. Brady, *Ibid.*, pp. 66-67; Kato, Naoko. 2007. "Japanese Texans after World War II." pp. 255-262 in Irwin A. Tang, Ed., *Asian Texans: Our Histories and Our Lives*. Austin, TX: The it Works, p. 256; Walls 1987, *Ibid.*, p. 210; 新日米新聞社東京支社編, *op. cit.*, p. 1258.
 47. Brady, *Ibid.*, p. 68.
 48. Rakoczy, *op. cit.*
 49. <https://texastimetravel.oncell.com/en/world-war-ii-on-the-texas-home-front-91541.html>.
 50. <https://www.thc.texas.gov/crystalcity>.
 51. Niiya, *op. cit.*, p. 230; THC (a), *op. cit.*, p. 11; THC (b), *op. cit.*, p. 7; Walls 1987, *op. cit.*, pp. 183-184.
 52. Chin, Aimee. 2005. "Long-Run Labor Market Effects of Japanese American Internment during World War II on Working-Age Male Internees." *Journal of Labor Economics* 23-

3:491-525.

53. グレン・サリバン.『海を渡ったスキヤキー
アメリカを虜にした和食―』. 中央公論新社.
2019年, p. 177; Gwynn Guilford. February
14, 2018. "History Lessons: The Dangerous
Economics of Racial Resentment during
World War II." [https://qz.com/1201502/
japanese-internment-camps-during-world-
war-ii-are-a-lesson-in-the-scary-economics-of-
racial-resentment/](https://qz.com/1201502/japanese-internment-camps-during-world-war-ii-are-a-lesson-in-the-scary-economics-of-racial-resentment/).
54. Walls 1987, *op. cit.*, p. 145.
55. ハルミ・ベフ.「戦中期の強制収容と戦後の活
躍」. pp. 131-158.ハルミ・ベフ編.『日系アメリ
カ人の歩みと現在』. 人文書院. 2002年, p. 140.
56. Brady, *op. cit.*, p. 67; Kato, *op. cit.*, pp. 256-257;
新日米新聞社東京支社編, *op. cit.*, p. 1258.

